毎　日　新　聞
6年(平成28年)10月22日(土)夕刊　4版　社会　6

ぼうこうがん転移抑制

風邪薬の成分「フルフェナム酸」

北大チーム発表

風邪薬の成分に、ぼうこうがんの転移を抑える効果があることをマウスの実験で確かめたと、北海道大のチームが英科学誌「サイエンティフィック・リポーツ」に発表した。来年度から治験を始める予定で、抗がん剤と一緒に使うことで完治を目指す治療法の開発が期待されそうだ。

ぼうこうがんは、ぼうこう内の表面にとどまる「浅いがん」と、奥の筋肉にまで達する「深いがん」がある。深いがんは他の臓器に転移しやすく、抗がん剤が効きにくい特徴を持っている。

チームは、ヒトの「深いがん」の細胞をマウスのぼうこうに移植。転移したがん細胞を調べたところ、元のがん細胞より動きが活発で、細胞内のある特定の酵素が3～25倍に増えていた。また、ぼうこうがん患者25人を調べると、転移したがん細胞で同様に酵素が増えていることが分かった。

これらの結果から、チームは「この酵素が、転移したがん細胞を活発化し、抗がん剤を効きにくくさせている可能性がある」と分析。マウスの転移したがん細胞を培養し、この酵素の働きを妨げる風邪薬の成分「フルフェナム酸」(抗炎症薬)を投与したところ、がんの活発な動きが止まった。また、抗がん剤だけを投与すると、がん細胞の一部が生き残って活発化したのに対し、フルフェナム酸を一緒に投与したがん細胞は抗がん剤が効き、ほとんど死滅した。

チームの田中伸哉教授(腫瘍病理学)は「フルフェナム酸は認可されている薬の成分のため、安全性も確認済みだ。早い時期にがん治療で実用化される可能性がある」と話している。

【藤野基文】